京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（3 年計画の 3 年目）

１．研究課題

東方ユーラシア馬文化の研究

A Study of Horse Culture in Eastern Eurasia

２．研究代表者氏名

諫早　直人

ISAHAYA, Naoto

３．研究期間

2021 年 4 月-2024 年 3 月(3 年度目)

４．研究目的

東方ユーラシアの諸地域は、中国でさえも家畜馬や馬車の利用において先進地域ではなく、西方からの直・間接的な影響を受けて二次的に始まったことが明らかとなって久しい。またおおむね前 1 千年紀後半から後 1 千年紀前半にかけて、馬車から騎馬へと戦争における利用形態が大きく変化するとともに、家畜馬や騎馬の風習がそれまで認められなかった地域に急速に拡散していく。日本列島における馬の出現は、この変化の最終局面として捉えられる。このように個別の地域・時代に対して個々に進められてきた研究成果を紡ぎ合わせた概観は可能ではあるが、東方ユーラシアにおける家畜馬や馬車・騎馬利用の出現や普及、その後の展開のプロセスについて、資料の実態に即しつつも一貫した視野のもとに論じた研究はまだほとんどない。本研究は、こうした問題点に鑑み、中国・朝鮮半島・日本列島の馬車・騎馬文化と馬匹生産について、ユーラシア草原地帯と比較しつつ、関連する考古資料と文献史料の検討をもとに明らかにしようとするものである。

It has long been revealed that Eastern Eurasia – including even China - came a late “second’ to the West in adopting utilization of domestic horses and horse-drawn vehicles. From the latter half of the 1st millennium B.C. through the first half of the 1st millennium A.D., how people used horses in war changed drastically, from the use of chariots to riding on horseback. And the methods used in the domestication of horses and riding rapidly spread to new areas. The appearance of horses on the Japanese archipelago can be seen as the final phase of this change. Thus, it is possible to present a rough overview by connecting research results for individual regions and periods. However, there are few consistent studies on the emergence and popularization of domestic horses, chariots and horse-riding in Eastern Eurasia, and the subsequent development process, that are based on archaeological data. In light of these issues,

this study provides some clarity regarding equine culture and horse breeding in China, the Korean Peninsula, and the Japanese archipelago using archaeological materials and historical documents comparing developments in these areas with those on the Eurasian Steppes.

５．本年度の研究実施状況

最終年度にあたる 2023 年度は、対面とオンラインとの併用により、人文科学研究所分館を会場として、計 6 回の研究会を実施した。まず、昨年度末に刊行した書籍『馬・車馬・騎馬の考古学―東方ユーラシアの馬文化』の合評会を実施した。また、定例の研究会では、主に日本考古学の視点から「日本古代牧の立地と構造」「欧米における騎馬民族征服王朝説の展開」「古代の蝦夷がウマを飼ったという記録は何を示すか」の諸問題を議論した。さらに、文献史学の視点から「新羅人と馬」について、言語学の視点から「馬に関わる言葉と文字」についての研究報告がなされ、それぞれ活発な討論がおこなわれた。年度末の 3 月には、本研究班の成果を中国の研究者に向けて発信する目的で、蘭州大学において対面の国際シンポジウム「馬・車馬・騎馬的考古学：欧亜大陸東部的馬文化」を開催し、中国・韓国・日本の研究者による計 13 本の研究発表をふまえて、討論と意見交換をおこなった。

６．本年度の研究実施内容

2023-04-07 『馬・車馬・騎馬の考古学―東方ユーラシアの馬文化』合評会 書評『馬・車馬・騎馬の考古学―東方ユーラシアの馬文化』 発表者 森下章司 大手前大学

2023-04-21 馬の生産と管理 日本古代牧の立地と構造：馬生産・飼育・管理・移送・調教の空間 発表者 山中章 三重大学名誉教授

2023-05-19 騎馬民族征服王朝説の展望 欧米における騎馬民族征服王朝説の展開 発表者 ライアン・ジョセフ 岡山大学

2023-06-02 古代朝鮮半島の馬文化 新羅人と馬：文献史料を中心に 発表者 田中俊明 滋賀県立大学名誉教授

2023-06-16 古代蝦夷の馬文化 古代の蝦夷がウマを飼ったという記録は何を示すか 発表者 松本建速 東海大学

2023-07-21 馬に関わる言語と文物 馬に関わる言葉と文字 発表者 野原将揮　チベット・ビルマ語の馬 コメンテーター 池田巧　朝鮮半島南西部地域と日本列島（河内と北部九州）の馬飼育適合性に対する動物考古学的アプローチ 発表者 金春昊 エクセター大学 馬具と王権：新羅の玉虫装飾馬具を中心に 発表者 王映雪 ハーバード大学

2024-03-16～17 “馬・車馬・騎馬的考古学：欧亜大陸東部的馬文化”国際学術研討会 草原地帯馬的利用：戦車和騎乗的地域交流 発表者 中村大介 埼玉大学 馬鐙的出現与騎馬文化的東伝 発表者 諫早直人 京都府立大学 戦国至北朝騎乗鞍具的発展演変 発表者 李雲河 北京大学 中国古代重装騎兵的発展

発表者 岡村秀典 黒川古文化研究所 従車輛制造技術視角重審商周馬車的出現及変革 発表者 張万輝 清華大学 従帯飾板看匈奴的当地及其影響 発表者 韓真聖 慶熙大学校 甘粛馬家塬出土戦国西戎車輛的発現与復原 発表者 謝焱 甘粛省文物考古研究所 中国古代馬匹役使的新認識：以甘粛石家墓地五号車馬坑為例 発表者 李悦 西北大学 中国騎馬発展的三階段：3世紀、5世紀、7世紀的変革 発表者 向井佑介 中国古代牧場的風景 発表者 菊地大樹 蘭州大学 火山噴発埋没的養馬相関遺址群的発掘調査：位于日本国群馬県榛名山麓的遺址 発表者 右島和夫 群馬県立歴史博物館

７．共同研究会に関連した公表実績

中国・蘭州大学において、蘭州大学歴史文化学院・京都大学人文科学研究所の主催により、2024年3月16・17日に国際シンポジウム「馬・車馬・騎馬的考古学：欧亜大陸東部的馬文化（Symposium on the Archaeology of Horses, Chariots, and Horse Riding: Horse Culture in Eastern Eurasia）」を開催した。

８．研究班員

所内

向井佑介、古松崇志、野原将揮、藤井律之

学内

吉井秀夫(文学研究科)、坂川幸祐(総合博物館)、大谷育恵(白眉センター)、大平理紗

学外

諫早直人(京都府立大学文学部)、中村大介(埼玉大学教養学部)、Joseph Ryan(岡山大学文明動態学研究所)、井上直樹(京都府立大学文学部)、石谷慎(京都府立大学文学部)、伍雅涵(京都府立大学文学部)、森下章司(大手前大学文学部)、佐藤健太郎(関西大学博物館)、河野保博(立教大学文学部)、篠原徹(国立歴史民俗博物館)、青柳泰介(奈良県立橿原考古学研究所付属博物館)、片山健太郎(埼玉県立歴史と民俗の博物館)、妹尾裕介(滋賀県立琵琶湖博物館)、岡村秀典(黒川古文化研究所)、菊地大樹(蘭州大学歴史文化学院)、王含元(北京大学考古文博学院)、姜伊(四川大学歴史文化学院)

9．共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生
人文研所属	1	7	1	2	2	1	28	6	12	12	6
（内女性）		(1)	(1)	(2)	(2)	(1)	(12)	(6)	(12)	(12)	(6)
京大内（人文研を除く）	3	5	0	1	1	0	16	0	5	5	0
（内女性）		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(3)	(0)	(0)	(0)	(0)
国立大学	5	7	1	2	1	1	26	1	7	6	6
（内女性）		(3)	(0)	(1)	(1)	(1)	(8)	(0)	(6)	(6)	(6)
公立大学	3	5	1	3	2	1	23	5	10	10	5
（内女性）		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)
私立大学	5	5	0	0	0	0	19	0	0	0	0
（内女性）		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(3)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人	1	1	0	0	0	0	6	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関	3	4	0	1	1	0	15	0	1	1	0
（内女性）		(1)	(0)	(1)	(1)	(0)	(1)	(0)	(1)	(1)	(0)
民間機関	2	2	0	0	0	0	9	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関	23	48	47	6	6	2	49	47	6	6	2
（内女性）		(19)	(17)	(3)	(3)	(1)	(19)	(17)	(3)	(3)	(1)
その他　※	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（内女性）		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	46	84	50	15	13	5	191	59	41	40	19
		(27)	(19)	(8)	(8)	(4)	(51)	(28)	(27)	(27)	(18)
※「その他」の区分受入がある場合具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数０とカウントし、この欄の記載不要											

10．本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	1		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	3		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）	1	(0)	1	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	器物の「伝世・長期保有」「復古再生」の実証的研究と倭における王権の形成・維持	1	R5.6	馬具の伝世	諫早直人
2	うまゆみ 5	1	R5.8	最初の鞍のつくり方	諫早直人
3	考古学ジャーナル 789	1	R5.10	日本古代の国家的馬匹生産の展開と交通路に関する基礎的研究	河野保博
4	古文化談叢 89	1	R5.10	魏晋南北朝時代の「馬俑」について	大平理紗
5	Antiquity. Advance online publication	1	R5.12	The origins of saddles and riding technology in East Asia: discoveries from the Mongolian Altai	Jamsranjav Bayarsaikhan, Tsagaan Turbat, Chinbold Bayandelger, Tumurbaatar Tuvshinjargal, Juan Wang, Igor Chechushkov, Manabu Uetsuki, Naoto Isahaya, Mark Hudson, Noriyuki Shiraishi, Yue Li, Chengrui Zhang, Gelegdorj Eregzen, Gino Caspari, Paula López-Calle, Joshua L. Conver, Gaëtan Tressières,

					Lorelei Chauvey, Julie Birgel, Nasan-Ochir Erdene-Ochir, Jan Bemmann, Gregory Hodgins, Kristine K. Richter, Ludovic Orlando, Christina Warinner, William Timothy Treal Taylor.

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書
なし

12. 博士学位を取得した学生の数
なし

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等
【シンポジウム】
2024 年 5 月 18 日の第 68 回国際東方学者会議（ICES）においてシンポジウム V「騎馬民族征服説再考―考古学からみたヒト・モノ・文化の移動」を開催し、研究班メンバーの諫早直人・中村大介・向井佑介・ジョセフ=ライアンらが報告する予定である。
【出版】
３年間に実施した研究会での報告と 2024 年 3 月に開催した国際シンポジウムの内容をもとに、最終報告論文集を出版する。現時点での論考執筆エントリーは約 30 名で、2024 年度中に原稿を集め、2025 年度前半に刊行を予定している。